



TITLE:

<批評・紹介>愛宕松男著「愛宕松男 東洋史學論集 第一卷」

AUTHOR(S):

佐々木, 達夫

CITATION:

佐々木, 達夫. <批評・紹介>愛宕松男著「愛宕松男 東洋史學論集 第一卷」. 東洋史研究 1988, 47(2): 378-384

ISSUE DATE:

1988-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154235>

RIGHT:

る。

附記

「東方」八〇號、一九八七年十一月、東方書店、二二—二三頁に、北海道大學佐藤鍊太郎氏の本譯書についての書評が載せられている。

一三一頁—二三 一四—二三

一八四頁—三三 所學夫子之道者、足以自樂也—審自得者、失之

而不懼

一八五頁—一四 一頁—六六頁四一條

二四三頁—七行 三八裏（追加）

一三行 琬琰錄—琬琰續錄

二四六頁—六行 原臣—原君

一九八七年五月 東京 平凡社

四六判 三三〇頁 二六〇〇圓

愛宕松男著

愛宕松男 東洋史學論集 第一卷

佐々木 達 夫

愛宕松男氏の著作集が刊行され始めた。全五巻という。それぞれの巻のタイトルは、第一巻「中國陶磁器産業史」、第二巻「中國社會文化史」、第三巻「キタイ・モンゴル史」、第四巻「元朝史」、第五巻「東西交渉史」である。ここでは、中國の窯業史に関する論文を集めた第一巻を紹介したい。

第一巻「中國陶磁器産業史」は二部に分かれる。第一部は「古代・中世陶磁器」で、中國陶磁器の概観を行い、陶磁器の流通形態を述べ、續いて唐代の陶磁器に関する論文五篇が配列される。第二部は「宋代窯器産業史」で宋代窯業史に関する論文と、陶磁器の輸送についての論文計八編が並ぶ。中國の陶磁器が、大量に質のよい製品を生産し、各階層に使用され始めた時代の社會と文化を、陶磁器を通して見た論考といえる。とくに、陶磁器の流通形態、生産組織、産業税を取り上げた、他の追隨を許さない雄篇が並ぶ。以下、各論文のタイトルを挙げ、簡単な内容紹介を行いながら、感想等を記したいと思う。便宜上、論文に1から15の通し番號を付け、タイトルの次に初出年と、本書内の頁數を記した。

1 「中國陶磁器史序說」（一九七五年發表の9論文一節に加筆、

一七(二七頁)

中國の土器・陶器・磁器の發展の様相を、使用階層や生産技術との関連に注意しながら概観している。氏の陶磁器研究に對する態度が窺える。些細なことであるが、氏は陶磁器を窯器という。こういう用語に初めは多少の違和感をもった。氏のいう瓦器は、日本でいう焼き締め無釉陶器、すなわち Stone Ware (炆器) をさす用語に當てはまる。中國史料から當時、無釉陶器を瓦器と呼んだことが分かる。今、中國の考古學では瓦器の名稱を用いず、陶器(日本の土器)と瓷器(日本の施釉陶磁器)を主に用いる。日本では瓦器を中世の灰色土器をさす用語に用いている。瓦器も、慣れないうちは難しい言葉である。とはいへ、氏の陶磁器の分類と名稱(土器、瓦器、陶器、瓷器)には利點がある。

2 「中國窯業における流通の諸形態」(一九八〇年、二九―五二頁)

陶磁器が産地から消費地に傳わる形態を、史料を擧げて次のように類型化しながら整理している。自給自足が終わると流通が始まる。瓦器の流通形態は次のように想定できる。

(1) 陶工が村に行き、現地で注文を受けて瓦器を焼く。(2) 窯場が固定され、陶工が製品を市場に持って行く。(3) 陶工は生産に専念し、製品は商人が大きな市場で販賣する。陶磁器は、技術の進歩と整備された施設の必要から、窯場が固定される。戦國期から(3)と同じ流通形態が生まれており、越窯は三國時代に流通圏が擴大する。唐代には生産・流通が發展する。しかし、廣い範圍で使用された越窯も、他の生産地と同様に通商ルートは廣くない。廣い地域に見られるのは、購買されたのではなく、(4)官人の禮物贈與が主であった。

遠距離まで販路を延ばすには、まだ陶磁器の需要量が少ない場所が多いからである。宋代に入ると、瓷器は支配階層の他に庶民大衆層にも普及し、生産量が激増する。瓦器に代わった瓷器は高級瓷器と粗瓷器に分化し、在來窯の規模擴大と新窯の續出となる。(5)仕入れ卸商人は、窯場で瓷器を買い、市場に運搬する。その時に過税を課される。仕入れ商人が戻った市場が、窯場の流通圏になり、擴大する。(6)店舗を構えた商人は、仕入れ商から瓷器を買い、販賣する時に住税を課される。しかし、仕入れ卸商人と店舗を構えた商人とは、規模の大小も様々で、はっきり區別できない時もある。宋代は、貨幣が流通し、富裕階層による商品需要が高まり、手工業が發展し始めた時代である。まだ奢侈性格が残るが、陶磁器だけは高級品と大衆品の兩方を生産した點で、他の手工業と違いがあるという。考古學や美術史の方法では、流通の形態に接近する方法が限られ、氏の研究の意義は大きい。

3 「唐鼎州窯は宋耀州窯の前身であろう」(一九六八年、五三―七二頁)

『茶經』で越窯につく評價を与えられたのは鼎州窯である。だが、晩唐以後、文獻に名が現れず、位置も不明確である。耀州窯は北宋に始まると文獻に記され、鼎州窯との繋がりは見られない。だが、耀州窯から唐代の陶磁器が發掘された。地理志等から、唐の鼎州と宋の耀州が同じ地域であった可能性を指摘し、唐の鼎州窯は宋に耀州窯と呼ばれたという。實體が不明瞭であった唐鼎州窯を知る手掛かりを与えた論文である。

4 「唐岳州窯」(一九六八年、七三―九五頁)

唐の岳州窯に關する文獻と發掘資料を駆使して、長沙附近に展開

した窯業の歴史を描き出している。銅官鎮はいま長沙縣内にあるが、北宋には湘陰縣内にあり、長沙の銅官鎮窯が唐岳州窯という。詩から唐岳州窯の生産状況をなぐめ、生産と市場とを考慮しながら、長沙近邊の窯業生産の變遷を概観している。

5 「唐三彩雜考」(一九六八年、九七—一五〇頁)

(1)唐三彩の中國陶磁器に占める位置、(2)明器ではなく實用器である證明、(3)なぜ急激に消滅したかの理由、(4)窯跡はどこにあったかなどを述べる。(1)科學的にはあいまいである唐三彩の名稱について検討を加え、中國陶磁器の分類を行って唐三彩を位置付ける。(2)唐三彩のすべてが明器ではなく、器皿類は實用器であったと指摘する。定説の副葬品説の弱點をつき、實用器としての奈良三彩や渤海三彩の例を引き、唐代の上層階層に限られて使用された實用器と述べる。(3)唐三彩は安史の亂以後に没落する。すでに、その理由として貴族層の没落と白磁の興隆が挙げられているが、これに銅彩という視點を加え矛盾を減らして説明する。銅器と三彩は貴族層で共用されたが、中唐以降は銅製容器が作れず、これに代わって白磁が容器の主となる。什器としての銅器と組み合わせられてのみ實用として用いられた三彩は、無用の容器となり、作られなくなる。(4)唐三彩が多く發見されるのは長安と洛陽附近である。三彩窯が發見された地、あるいは文獻から存在が推定される地域十箇所を挙げている。

6 「唐三彩續考」(一九八二年、一五一—一七二頁)

前論文「唐三彩雜考」で指摘した、唐三彩實用器説を補強するために書かれた論文である。始めに、高火度燒成品は實用容器として、低火度燒成品は非實用的な明器として、初めから區別があったと指摘する。前論文で、低火度燒成品は實用容器でないという一般

的な説を退けた氏が、ここで實用に不適格と斷定しているのは矛盾がある。墓出土品以外に發掘資料がなかった唐三彩も、最近の發掘によって住居跡から出土した。これは、氏の推論を補強するものである。一般には、唐三彩は墓に副葬する神明之器であるが、そのうちの容器をみると、粗陶は明器として、精陶は實用器として製作した。しかも、精陶は故人の愛用品として墓にも副葬したというのが、氏の結論である。氏の説は、まだ一般的に受け入れられていないが、住居跡から發見される以前から、唐三彩に實用品があることを指摘してきた氏の説は高く評價される。實用品であったことを證明する發掘調査例の増加が待たれる。なお、餘論があり、唐三彩は以後の三彩に技術的につながること、唐三彩枕が實用であったことを述べている。

7 「逸文唐令の一資料について」(一九七八年、一七三—一八六頁)

失われた唐令の一條を復元した論文である。「諸經用瓦器破損者。除歲二分。以外徵填」である。官廳備え附けの公用瓦器は、年間に二割の毀損率が許されることを示す條文という解釋を示している。評者のような素人にも分かり易い内容である。

以上が第一部「古代・中世陶瓷史」に收録された論文七篇である。次からは第二部「宋代瓷器産業史」に入り、宋代の陶磁器を通してみた文化、生産状況、流通、税などを取り上げた論文、宋代陶磁器の重要文獻の譯や考證、さらに陶磁器の輸送方法を紹介した論文を集めている。

8 「宋代の文化と陶瓷」(一九七七年、一八九～二二頁)

これは今までの實證的な論文と違い、中國陶磁全集の總説として書かれたものである。分裂時代から統一時代の宋になると、交換經濟が進展し、産業も活發となる。これに伴って瓷器産業も成立する。窯場數が激増し、製品も多様化する。宋代社會における瓷器の普及には著しいものがあり、官廷や官僚社會では瓷器が多用されるようになり、都市住民の間にも陶磁器が普及し、農村でさえも地主層は陶磁器を使用する。陶磁器を造る人々には課税され、買付け商人の動きで流通圈が決まったことが容易に理解できる。宋代の陶磁器と窯業史を研究するうえで、重要な基礎知識を與える優れた概説であり、文章も他の論文よりも読み易い。多くは氏が獨自に研究された内容を再び説いたものであり、その根據となる史料は本書の各論文に示されている。

9 「宋代、陶磁器産業の成立とその發展」(一九七五年、二二～二七〇頁)

窯場の記事が史料に急激に増えるのは、中唐期からである。それ以前は、瓦器工が村から村へ移動し、注文製造が終わると窯が廢絶されるのが一般的だった。中唐期から晚唐期にかけて施釉陶磁器が固定された窯場で生産されるようになり、各地方にいた士大夫層を主とする上層社會の人々が實用品として使用したことを、史料の増加は反映している。宋代に入ると窯場、生産量が飛躍的に増加し、民窯の他に高級品を生産する官窯もできる。官窯の始まりは吳越國の越窯である。宋代は吳越國を併合して越窯を官窯にしたのではなく、遅れて、北宋末に都の近くに置かれた汝州窯系統の官窯が始まりである。宋代は唐代に比べると、文獻に現れる窯場の名や發見さ

れた窯跡が三倍になり、實質的な生産量は十數倍となったらしい。江南の富が經濟力を生み、陶磁器は一般社會に流通する商品となり、社會一般の日常必需品となるという。宋代に陶磁器が社會全體に普及したことを、文獻を用いて明らかにした論文である。

10 「宋代陶磁器窯場における産業機構」(一九八二年、二七一～二九三頁)

五代十國は各地で何度も徴税されたから、製品が輸送される範圍が限られた。宋代は税が大幅に減り、前代から續く窯場は規模を擴大し、その商圏の隙を埋める粗陶瓷を作る小規模窯場が各地にできた。産業組織の復元については、後出の文獻から基本構造を描き出し、高級大規模窯場としての景德鎮の組織を南宋と推定した「陶記」などから見る。大型經營者は専用の窯を用い、優秀な専門工人を抱える。小規模雜器窯場の經營者は共用の窯で、家族勞働を主とし、これに徒弟勞働力を加えることもあるという。文獻の少ない時代の産業機構を、巧みに復元している。

11 「宋代における瓷器行用の普及」(一九七七年、二九五～三二六頁)

宋代は三州から土貢として瓷器が課せられ、官廷でも瓷器が採用され、都には貯藏保管する瓷器倉ができる。官廳では瓷器は一割の破損率が認められており、官僚・士大夫層に日常必需品として瓷器が浸透していた。さらに都市居住民へも瓷器が普及した状態を、首都や地方都市の場合にわけて描き出している。階層によって使用した瓷器の質が違い、購入する店舗にも差があったが、縣城の市民にも十分に普及している。鄉村では在地地主層はもとより、農民層の生活の中にも瓷器が普及し、朝廷から農村に到るまで、社會の必需

品となった様子を述べている。

12 「宋代の瓷課について」(一九七八年、三二七―三四九頁)

瓷器に對して國家が課税するのは唐中期以降である。宋代に、瓷器生産者である窯場戸から瓷窯税をとる機關である瓷窯稅務が敷設されたことを、それを推測させる文獻を操作して巧みに指摘している。商人には商税が課せられるが、生産者には課利(陶磁器の場合には瓷課で、これは産業税、生産税である。商税すなわち商取引税ではない)が課せられることを推定している。元代には將祈の「陶記」から瓷課があったことが明確となるという。しかし、次の13論文に見るように、將祈の「陶記」は南宋に遡ることが判明したから、宋代から瓷課が存在したことが證明されたことになる。

13 「南宋文獻、將祈撰『陶記』の譯注」(一九八四年、三五一

～四二一頁)

宋代の窯業に關する文獻は少ない。この論文は景德鎮の姿を描いた最も重要な文獻の譯注である。「陶記」についてはすでに多くの譯注が發表されているが、白焜氏以外は元代文獻としている。愛宕氏は十章に分け、次のようなタイトルを付けている。景德鎮窯前史、南宋期の窯制と瓷課、陶戸(製陶業者)の分類、滿窯、燒成の諸段階、鎮窯の種類と市場、陶土と釉藥、瓷器生産段階での分業、附加税の苛増、景德鎮窯場の衰微とその原因、結語、である。「陶記」を宋代文獻と扱い、これまでの譯注を比較しながら、極めて詳細かつ膨大な注釋を附けた宋代窯業史研究上の意義は大きい。

14 「劉新園氏の『將祈『陶記』著作時代考辨』を讀む」(一九

八三年、四一三～四四〇頁)

元代文獻としての將祈「陶記」に對する疑問點を指摘し、劉氏論

文を紹介・批評して、次のように結論している。考古資料による考證では、陶土、裝燒方法と裝飾文様の特色から、宋代であることを證明している。文獻資料による考證では、販路の伸縮と競合する窯場の年代、および窯場に對する正税と附加税という制度の面から、「陶記」は宋代の文獻であると證明している。この劉氏の證明が基本的に正しいことを愛宕氏が認め、さらに劉氏説の誤謬を修正した論文である。

15 「東西交渉史上における中國陶器、特にその輸送についての一考察」(未發表論文、四四一～四六一頁)

東西交渉を第一期から三期に分け、その發展の狀況を述べている。第一期は古代・中世のシルクロードで、中國から絹布・漆器、西域から寶石・珍貨が運ばれた。第二期は中世・近世の南海航路で、スパイスが重要な交易品となり、ここに中國の陶磁器も加わる。海路は唐代以降に盛んになるが、宋元時代以降は陸路を壓倒する。第三期は十六世紀から始まる大航海時代であり、近代の茶貿易である。この時代はイスラム圏の經濟を破滅させ、商品には入らない毒物阿片を武力で賣り込むなどの行爲がなされ、東西交渉の性格が一變し破局に陥った。さらに、明清時代を主とする文獻に記載された陶磁器の運搬方法についても述べている。

以上、收録された論文の簡単な紹介と感想を記した。著者、愛宕松男氏は明治四十五年京都に生まれ、京都帝國大學を卒業後、東北大學教授や京都女子大學教授等を歴任し、學界の第一人者として指導的立場におられる。氏は本書において、唐宋代の生産、流通、税制、あるいは社會や文化の特色などを陶磁器を通して見ておられ

る。鋭い洞察力と廣範な知識に基づいて緻密に史料を分析されていると思う。その上で、最近の中國考古學の成果を隨所に取り入れていることにも畏敬の念を禁じ得ない。

評者の専門は考古學であり、中國陶磁器に接する態度や研究方法、目的には、愛宕氏と異なる點がある。文字に書かれた記録から窯業史を復元する氏の立場と、實際に土中から發掘された窯跡や製品の破片から復元する評者の立場は、資料の解釋にずれを生ずる場合がある。文獻の少ない時代については、考古學の分野で當然と想っていたことと異なる見解が示される部分もある。しかし、考古學の方法では考え難い産業史としての窯業のありかたや制度などに関して、新たな研究の視點と多くの事實を教えて頂き、愛宕氏の學問の廣さと深さに敬服させられた。

考古學では事實の追求が主になり、どうしても物に則して狭く深く考えることが多いが、氏は歴史的事實の意味と理由を、史料の巧みな解釋と資料による裏付けによって廣く説明している。その前提として、氏の打ち立てた理論があることに注意しなければならぬ。今まで關わりが論じられなかった史料を、問題意識の鋭さと學識の深さを基に組み合わせることで、新たな見解を述べられたことも本書の價值を高めるものであろう。唐三彩が墓の副葬品だけでないことや、なぜ急激に消滅したかの理由、唐代の有名な窯場が宋代に忘れられた事情、あるいは施釉陶磁器が社會に深く浸透する理由とその過程など、氏とともに考える楽しみが味わえる。

本書に集められた論文は、その時々著者の學問的關心、學界の動向にたいして書かれたものと思われる。多くは、修正されず、發表當初の姿を留めた論文のようである。大きく見れば唐宋時代の窯業

史研究の書であるが、細かく見れば、それぞれの目的をもって書かれた個々の論文を集めた書である。そのため、必ずしも、それぞれの論文は前後で直接的な關連を持つものばかりではない。また、著者の周到な研究態度からは當然のことながら、重複する説明や概説が、それぞれの論文に少しずつ見られる場合もある。しかし、そうしたことは本書にとってほとんど問題にはならない。本書の最大の特徴は、多くはない史料を巧みに連結させて新たな解釋を提示し、窯業史を理論化して歴史の中に位置づけている點にある。唐宋代の産業史にとって益するところが多いのは當然であるが、中國考古學や陶磁史の分野への影響の大きさにも計り知れないものがある。

愛宕氏と評者との年令差のためか、あるいは評者の文章にたいする好みのせいも、氏の文章は決して読み易いとは感じられない。評者のような現代日本語の易しい文章に慣れた考古學研究者にとつて、内容をとりながら読みすすむのは、中國語史料が基本となる論であるだけに樂なことではなかった。窯業史や陶磁器に疏い一般の讀者にとつては、難しい用語や言い回しも少なくないと思う。しかし、読み進むうちに、本書にちりばめられた學問上の寶石の如き成果に、しだいに樂しみを感ずるようになった。本書が學界に大きな利益をもたらす専門書であることは疑いない。

氏の中國陶磁器・窯業史に關する論文は、學術雜誌に發表されたものが多い。かつて評者もいくつかの論文をコピーし學恩を受けたが、入手に困難な雑誌もあった。東洋史專攻以外の者にとっては、氏の論文の所在を探ることも容易なことではない。中國窯業史を文獻を主に使って復元する研究は、決して多くない。こうして論文が

まとめられ、愛宕氏の中國黨業史に關する考えの全貌を容易に手にすることができるのは、後學の者にとって大變に便利のよいことである。關連する分野の研究者にも多大の益をもたらすことであらう、唐宋代を中心とした中國黨業史に關する研究が一冊に編まれたことを心から喜びたい。

一九八七年六月 東京 三一書房
A5判 四七八頁 一二〇〇〇圓

中央大學人文科學研究所編

五・四運動史像の再檢討

森 時彦

本書は、中央大學人文科學研究所の研究チームとして登録されている五・四運動史研究會の報告論集である。實質は論文集であるが、編者は、個別論文のよせあつめにおわることをいさぎよしとせず「少しでもまとまりのある論文集」（四八五頁。以下、とくにこのとわらないかぎり本書の頁數）にするために共同討議をかさね、左記のように各論文が一章ずつを構成するように編集してある。

序論	五・四運動史像再檢討の視點	齊藤 道彦
第一章	五・四運動史像の史的檢討	笠原十九司
第二章	パリ講和會議と山東主權回收運動	笠原十九司
第三章	「五・四」北京學生運動斷面	齊藤 道彦
第四章	五四期上海の社會狀況と民衆	古厩 忠夫
第五章	五・四運動と國民黨勢力	末次 玲子
第六章	南北對立と連省自治運動	味岡 徹
第七章	第一次大戰期における中國「國民經濟」成長	高綱 博文
補論	『惲代英日記』讀書劄記	姫田 光義